

セントクリストファーネビスの夜

御宮狼

第一話

*

このままプールに浮かんでいよう。
誰もいないプールで、僕は祈るように静かだ。
ファイバーグラスでできた天井に都会の夜空が張り付
いている。

だが星は見えない。

1

*

香村はメニューを閉じた。

深く呼吸し、店を退散した。そして暑さで沸騰する街
へ逃げように入ってしまった。

車を舗道に乗り捨て坂を上った。立体ガード上を銀色
の電車が爆音を残して走り抜けていった。

見上げると香村が数時間前に浮かんでいた高層ホテル
のプールが見えている。青白い光線が都会の夜に地上高
く浮遊するように全体を照らしていた。

薄暗いガード下を足早に歩いた。黒ネクタイを締めた
女がパイプ椅子に座り、客を占っていた。後ろには行列
が続いている。占う女の顔は凹凸を失っている。年齢を
限定できない。

占う女が突如笑い出し、巨漢の女の顔面上で両腕を交
差させバッテンをつくった。前屈みに客の目を睨みつけ、
両腕を解き全力で振り落とす。それを何度も繰り返した。

口をきけない巨漢の女に、女は手話を利用して神の言葉
を伝えた。

*

太りすぎた女は猿顔で冷笑し、バツテンを繰り返す女
占いに丸めた紙幣を女の口に突っ込んで顔面に唾を吐き、
女たちは去っていく。

*

セロハン紙に包まれた赤い花の一塊が洗面台の水に浸
けられている。脱衣所には等身大の鏡が壁に立て掛けら
れ、一本のヒビが上から下へ走っていた。女物のネック
レスがそこに掛けられていた。

全体を後ろに流した髪。薄い唇。細く納まった鼻。切
れ長の目。挑発する顎。全裸のまま鏡を覗き込んで髭を
剃る男の背後でシャワーが落下し、天井から吊された電
球が壁や床へ濃淡を決めて影を付けていた。

香村は顔を剃刀でズルズルとやる。指に軽くたしかな
手応えが伝わってきた。それは女に捨てられた男が化粧
を思い立つときの気持ちだろう。具体や抽象を流し、だ
が何も捨てられず、多くを見届けたくて、目を凝らす。
だが正視もできない。

*

雌豹は決まって背後の闇に紛れ込もうとするだろう。

*

落下音に混じって音楽が這うように漏れ聴こえていた。
シャワーに入った。採光窓から外を覗いた。雨が八月
最後の夜を叩きつぶしている。フランスの輸入車が滑り
込んでいく。赤い車体はかろうじて横断歩道の直前で急

停止した。

真昼泳いだプールの匂いが体臭となって張り付いているような気がした。

角張った石鹸を直接体に擦り付けて洗った。泡立て、すぐにシャワーで流した。水は体の熱を奪い、毛穴に溜った垢や油や匂いを消していった。

*

足下を濁流するのは泡や水だけではないだろう。汚穢や屈辱や排泄感。剥離する感情。痩せていく自分。

引力だけではない何かにかかれ、配管の穴へといっきに吸い込まれていく。

香村は口のような穴に執着した。眼は冴えることもない。いつものように背をそむけ、すべてを見越し、起立したまま昆虫のように固くなるだろう。

信号が変化した。赤いスピードが雨を弾いて走り去っていく。

シャワーをタイルのうえに投げたまま男は足付きの白い湯舟に身を入れた。湯は体の指紋を溶解させてしまうとおもわれるほど熱かった。

男は栓を抜き取って浴槽を空にした。

*

「あした帰る」

ケイの声だ。

「今どこだ」

「マニラから。マニラベイホテル」

「そう」

「うれしくないの？」

「何が」

「明日帰るのよ」

「ああ、そうか」

「感動にむせび泣いてよ」

「言って、自分で笑うな」

「はずかしいのよ」

「声、死んでるね？」
「声？」
「ああ。疲れてるのか？」
「そんなことないわ。海底ケーブルのせいよ」
「フィリピンの皆さん、元気？」
「毎日ジブニーのガソリン抜き取られてる」
「黄色いTシャツ、東京でプレミアム付いてるよ」
「イメルダのハイヒールいくらで売れるかな？」
「土産変わりに持ってこいって言う気？」
「段ボール十箱ぐらい頼む」
「航空便ね」
「迎えに出ようか、あした」
「到着は午後、夕方ぐらいかな」
「感動的だな」
「抜けてきて、会社」
「で、まっすぐ遊園地でもいこうか」
「感動的。ショーでも見れないかな」
「ショー？」
「ファッション」
「何だよそれ」
「あなた、チケット手に入るでしょ」
「イメルダにでも影響されたのか？」
「悪いかしら。マルコスのブリーフ、誰れのデザインか
教えて上げましょうか」
「ああ、教えてくれよ」
「あ、それから、パエリア食べさせて、あなたの」
「何だよそれ」
「パエリアよ」
「俺が作るのか」
「そうよ」
「ああ、いいよ」
「極上のね」
「マラカニアンの晚餐、凌ぐやつをね」
「絶対ね」
「了解だ」
「東京、暑い？」
「記録的だ」
「あなた、毎日忙しいの？」
「三日前にソウルから帰ってきた」

「仕事？」
「遊び」
「うそ」
「半分……」
「疲れてるみたいだね」
「……そうかしら」

*

年明け、政情不安を伝えるフィリピンにケイは飛び立った。新人民軍やMNLFの革命派ゲリラに接触しながら反政府民主主義勢力の地下活動に焦点を当て、マルコス体制の崩壊を追跡してきた。

二月、革命の前夜、マニラから興奮して電話を掛けてきた。深夜だった。まくしたてるケイに香村は明け方まで付き合った。それから半年の間、ケイはフィリピン全土を駆け巡り、革命後における民衆の生活に潜伏し、日本の通信社に記事を送りつづけてきた。

勝利したのはいったい誰か。革命によって本当に救われたのは誰なのか。

「スモーキーマンテンの夕陽は格別だったわ。あそこにいるといつの間にかカメラを置き忘れてしまう。革命のさ中、スモーキーで子供たちと水遊びをした。無邪気で、瞳が輝いていて、あの子供たちはいいわ。壊れたリングを仮設していっしょにバスケットボールを楽しんだわ。革命なんて遠い出来事。……絶対の貧困なんて所詮私たちの都合のいい視点でしかない」

「マルコスには逃げきれないかな」

「もうこれで、私の革命劇の取材は、おしまいよ」

「とうとうフィリピンに夜明けか」

「違うわ。私に闇が来たのよ」

電話はそこで切れた。